

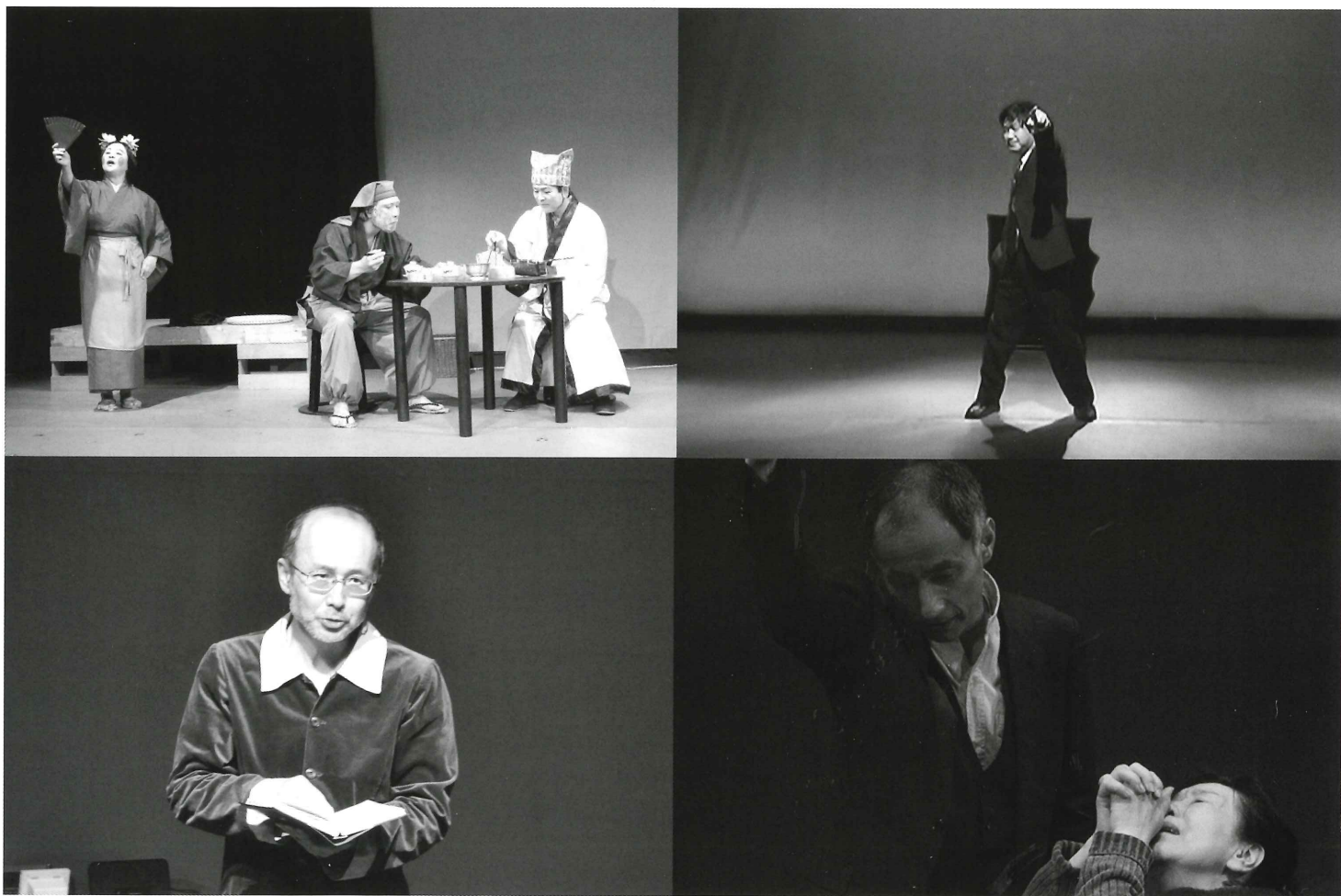
DRAMA かながわ 70

神奈川県演劇連盟事務局：神奈川県横浜須賀町米が浜通1-3 Tel.045-263-4472

第11回 神奈川演劇博覧会

2014年3月15日(土)・16日(日)

神奈川県立青少年センター 多目的プラザ



2014年演劇博覧会を観て

劇団河童座 横田和弘

初春の風物詩「演劇博覧会」が、2014年3月15・16日に青少年センター多目的プラザにて、開催された。

今年の出演劇団は、15日が「イケタニ企画 from チリアクターズ」「空飛ぶペンギンカンパニー」「劇団かに座」「虹の素」「ライト・トラップ」16日が「劇団きさく座」「湘南テアトロ☆デラルテ」

「The Yokohama Shakespeare Group」「PAP」以上9団体。劇団創設60年を超える「劇団かに座」から、この公演を旗揚げとする「空飛ぶペンギンカンパニー」まで、幅広い劇団が参加してくれた。

2004年 この企画の第1回演劇博覧会で旗揚げしたのが、現在横浜市磯子区でしっかりと地域の劇団として、精力的な活動をしている「劇団横綱チュチュ」。「空飛ぶペンギンカンパニー」に その想いをダブらせる。元気にまた、演博仲間が育ってくれば、との思いがする。

今年しみじみ思ったことは、「この演博は定着したな一」の想いでした。初めての参加団体も2団体あり、演劇博覧会は、ごった煮の集団であるはずなのに、チームワークの良ささえ感じた。仕込やバラシ、次の劇団の紹介、打ち上げなど、「仲間」意識が例年にも増して強く芽生えていたように見えた。

内容も、一時間という枠の中での芝居創りが、ただ、テキレジによる時間短縮ではなく、博覧会仕立て、あるいは自分たちの参加スタイルをしっかりと見極めでの参加と、いい意味での“慣れ”を感じた。作品もストレートプレイは勿論、朗読・インプロ・自主公演の宣伝プロモーション・英語劇など、様々。参加団体に常連もできてきたし、観客にも常連客、演博ファンも増えてきたのは、嬉しい限り。

この博覧会が始まったのは、先に書いたがちょうど10年前の2004年。区切りなので少しこの「演劇博覧会」を振り返ってみたい。1回から3回までは、相鉄本多劇場での開催だった。思えば、演博は偶然というか、いくつもの幸運のため生まれた企画だった。SAAC（横浜舞台芸術活動活性化実行委員会）の企画枠が、1週間舞台が空いたのがキッカケ。ちょうどそのころ、G/9-Projectの佐藤氏たちが、かつてのSTスポットで行われていた、「スパーキングシアター」みたいな、「お祭り」を行いたいとの声を聞いていたので、SAACが取り上げたのが、第1回目の演劇博覧会。

映画を見に来た人、通りすがりの芝居を観たこともない人たちを一人でも劇場へ足を踏み入れさせようとの想いが、「入場無料・出入り自由」の大きな理由。

さらにそれぞれの劇団の観客に、他の芝居も観てもらい新しいお気に入り劇団を発掘してもらうことや劇団同士の交流など、色々な思いで始めた。「入場無料、出入り自由」は、その当時の名残。最近では、さすがに「出入り自由」は見直されてきたが…。

そして第3回までが相鉄本多劇場で行われたのですが、3年を一区切りと考えていた企画を、ちょうどその時「演劇博覧会」を見に来てくれた、当時の青少年センターの小宮館長が、センターでやれないかとの声を掛けてくださり、渡りに船と会場を青少年センターに移し、以来今年の第11回の開催を数えてきた。

不思議なのは、センターに移ってからのの方が、参加劇団も増え、入場者数も増えてきたことだ。それは、連盟の担当者の精力的な告知など働きかけと、青少年センターの協力が大きいのは、たしかなこと。感謝したい。

正直 スタッフ面の問題。経済的な問題。集客のバラツキの問題など課題は残る。しかし、当初無謀とも言われた、高校演劇の発表会のような企画がこんなにも続いてきたのは当然それなりの魅力があるからこそ。それは、新しい出会い、刺激、仲間創り…いろいろあるが、何より「楽しいこと」。

神奈川には、まだ知らない劇団が、新しくできあがる劇団がたくさんあるはず。

いつまでも、いつまでも、この演劇博覧会が 創る側、観る側の楽しい出会いの場になってほしい…。そんな想いを強くした第11回神奈川演劇博覧会でした。

第11回神奈川演劇博覧会 参加団体

3月15日(土曜日)

イケタニ企画 from チリアクターズ「廻るサインポール」
空飛ぶペンギンカンパニー「つぼみ」、劇団かに座「猿の手」
虹の素「PENGUIN ~Lapis lazuli 17 years ago~」
ライト・トラップ「ひとり芝居作品集 お父さんのらぶそでい」

3月16日(日曜日)

劇団きさく座「東は東」、湘南テアトロ☆デラルテ「ばいばいマイマム」
The Yokohama Shakespear Group「Hamlet」、PAP「~寄席気分~」

マグカル劇場「青少年のための芝居塾公演」

今年も芝居塾のシーズンがやってまいりました。2014年は“劇団やぶさか”が担当させていただきます。通常、当劇団のキャストは女性ばかりですが、今回は男性キャストも含めた総勢67名という大所帯となりました！

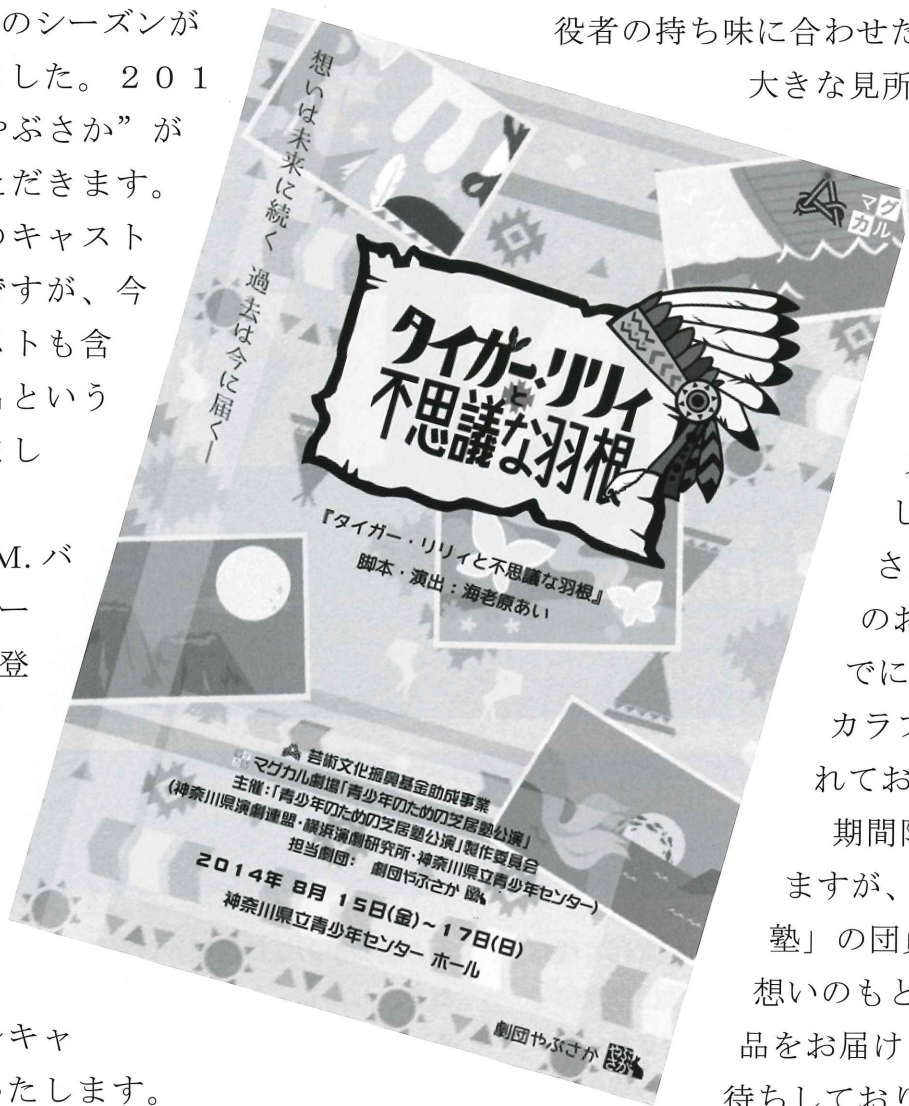
作品は、J.M.バリーの名作『ピーター・パン』の登場人物であるタイガー・リリィを主人公にしたオリジナルストーリーです。

今回はダブルキャストでお届けいたします。

役者の持ち味に合わせたそれぞれの演出は、大きな見所の1つとなっておりますので、ぜひ見比べてお楽しみいただければと思います。

また、塾生は役者だけではなく、全員が裏方作業も担当しております。たくさんの方々のスタッフの方々のお力添えのもと、すでに様々な才能で作品をカラフルに色付けしております。

期間限定の座組ではありますが、全員が「劇団芝居塾」の団員であるという強い想いのもと、明るく楽しい作品をお届けします。ご来場、お待ちしております。



芸術文化振興基金助成事業 マグカル劇場「青少年のための芝居塾公演」

主催：「青少年のための芝居塾公演」製作委員会（神奈川県演劇連盟・横浜演劇研究所・神奈川県立青少年センター）

担当劇団：劇団やぶさか

『タイガー・リリィと不思議な羽根』 脚本・演出：海老原あい

- ◆ 日程 … 2014年8月15日（金）19時＜地＞
16日（土）13時＜地＞／18時＜陽＞
17日（日）13時＜陽＞

※ 受付開始は開演の1時間前、開場は開演の30分前です。＜地＞→TEAM 大地 出演 ＜陽＞→TEAM 太陽 出演

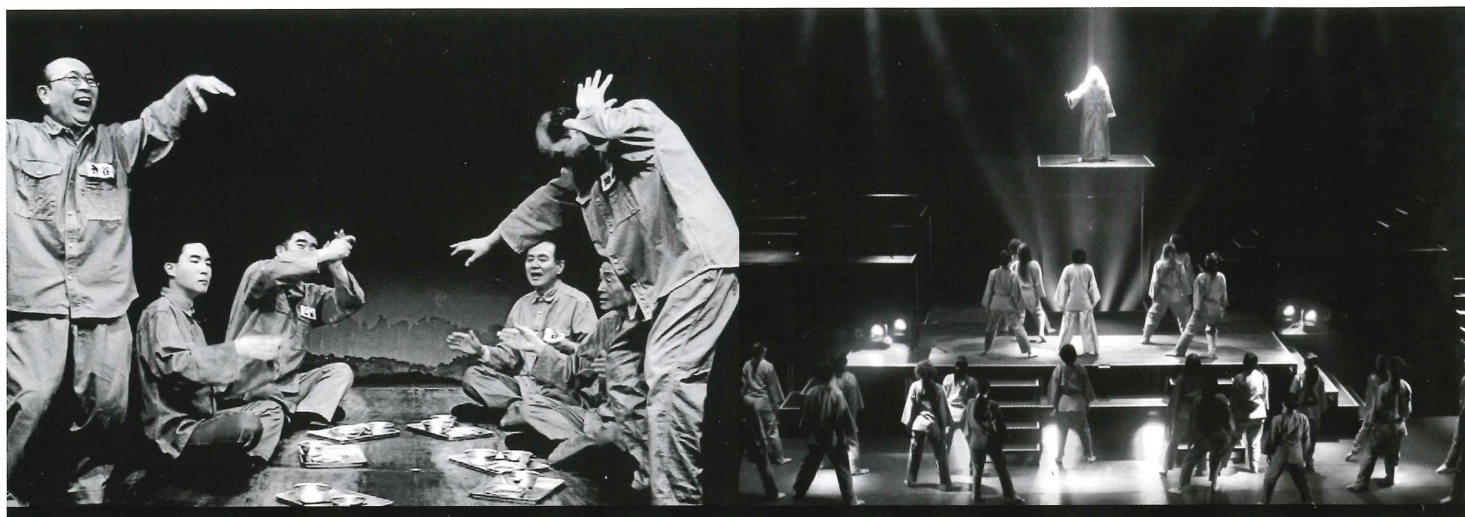
◆ 会場 … 神奈川県立青少年センター ホール（JR「桜木町駅」北改札より徒歩7分）

◆ 料金 … 前売・当日共 一般 2,000円／高校生以下 1,000円

☆ リピーター割引 一般 1,000円／高校生以下 500円

※ 受付にて、当公演の半券をご提示ください。

◆ 青少年センター URL … <http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/p802754.html>



TAK IN KAAT

京浜協同劇団 創立55周年記念 第86回公演
「人のあかし2014 ～ある憲兵の記録から～」

KAAT神奈川芸術劇場 大スタジオ
 2014年 4月25日(金)～2014年 4月27日(日)

神奈川県演劇連盟プロデュース公演
「REMIN」

KAAT神奈川芸術劇場 大スタジオ
 2014年 5月1日(木)～2014年 5月4日(日)

京浜協同劇団「人のあかし」を観て

劇団河童座 横田和弘

この芝居を、我が劇団の一番若い高校生を連れて観に行った。その青年の感想は、「目の鱗が取れた気がした…、こんな世界を初めて知った」だった。それはそうだ。今、韓国、中国に対する諸問題の中、日本政府、マスコミも、戦争は終わったこととして蓋をしようとしている中、若者が真実を知る機会は少ない。そういう体制や世論(?)に真っ向勝負の作品に、京浜協同劇団の真骨頂を見た気がした。

この作品は、元憲兵による、自分の犯してきた非道の限りを尽くしてきたことへの自戒の念で綴られた手記を元にした作品、いわば、ドキュメントに近い芝居なのだ。事実なのだ。私ですら、正直「何もそこまで日本を、日本人を悪く書かなくても」と、気が重くなるシーンが、いくつも続いた。でも、事実なのだ。言葉で言うのは簡単なのだが、目を背けてはならない、忘れてはならない事実なのだ。それを言葉ではなく、芝居で観せることで、圧倒的に観客に訴えかけることが出来る。逃げ場のない劇場の中で最後まで見せられた高校生の、感想は当然だし、得難い経験をしたこととなった。

フィクションは時として、真実より物を伝える力がある…

との世界がある。私は、どちらかと言えばその中の人間である。しかし、この作品は真逆である。事実が根っこである。フィクションでは、こんな作品は出来上がらないだろう。人間にそのような行動をとらせるのは、戦争と言う不条理な世界が、人間を追い込むんだ…などときれいごとで納めてしまいそうである。でも、この作品は、ただひたすら「罪は罪」、と非情なまでに問いかけてくる。客席に重く重く問いかけてくる。勿論笑いもない…シーンと静まり返った客席。そして 終演を迎えると、堰を切ったような拍手の嵐。涙する人も多かった。

残念なことに(?)やはり客席の平均年齢は高かった。いろいろな世代の人がこの芝居を観て、どんな感想を持つのか、興味深い。もし、テレビでこの作品が流されていたら、多分他のチャンネルに変えられてしまう気がする。今は、“そういう平和な時代”なのだから…。でも、芝居はチャンネルを変えることはできない。そこに、芝居の力がある。

この作品は、演劇の一つの力、あり方を示したと評価したい。そして、こういう芝居は、やはり京浜協同劇団にしかできない…続けてもらいたいと、しみじみと感じた。

REMIND劇評

よこはま壺座 濱田重行

まず、神奈川演劇連盟と神奈川芸術劇場との提携企画、「TAK IN KAAT」として、この「REMIND」と、「人のあかし」の二作が上演されたことの意義に、深く感銘しています。昨年はわが劇団よこはま壺座が、大スタジオの舞台に上がったのですが、苦労したことを思い起こすと、良くここまでやったなどその努力と挑戦に敬意を表します。

劇場にある備品だけで構成した装置や、コンテンポラリーダンスとのコラボレーションなど、目新しい演出が目立っていました。ミザンスもよく考えられ統一感がありました。

ではありますが、中身としてどうだったのかというと、少し首をひねるところが多くあるのが感じられます。

緑慎一郎氏は、昨年上演された「踏切があがる時」など、なかなか意欲的な書き手であることは充分認識し、かつ注目をしている書き手です。取り上げる内容が現在の神奈川県内の書き手が扱わないような題材を作品にしている点では、稀な書き手と云えましょう。でも——、と言い出さなくてはならない点は、中身の掘り下げ方が浅く、かつ結果的には作者の個人的心情で終わってしまっているのがまことに残念な思いがするのです。今回もその感が強く、新興宗教を題材にしているながら、追及が甘く、結果的には新興宗教を追認しているかのような思いが蔓延してしまうのは何故か？やはり掘り下げ方が浅い所為なのではないだろうかと思ってしまうのです。

「あなたはしあわせですか？」という命題的なテーマを発しているながら、最後は個人的感傷で終わってしまう情けなさは理解しがたい。扱った題材がわたしたちの日常ではなく、〈新興宗教〉という、それも異常でかつすでに断罪された事件を扱っているにもかかわらず、事実を誤認して矮小化し、かつ観念化してしまったことがその原因と思われれます。

芝居では〈沙羅双樹〉という名に変えたとしても、オウム真理教であることは容易に推察することが出来ます。にもかかわらず、あの事件の残忍さを少しも超えることなく、矮小化してしまったことには、忿懣やるかたない。

新興宗教を扱うなら、いまだにその後塵の〈アレフ〉や、元教団幹部広報部だった上祐氏が主催する〈光の輪〉に集まる人たちが居る不思議さや、その他にも、新興宗教が与野党の一部に食い込み、〈集团的自衛権〉の内実化に手を貸す宗教団体や、明らかにされていない悪辣な新興宗教はいくらかもある。マスコミがタブーとしている宗教に踏み込んでこそ、演劇ジャーナリズムの真骨頂があろうかとも思

われますが、マスコミ報道それも上辺だけの報道だけをつなぎ合わせて、事件の非道性と人間の有り様を扱えなかったことは、残念としかいいようがない。戦争中の国家神道だって、廃仏毀釈して、神道を国教とした新興宗教に過ぎない。新憲法下では、政教分離とされているにもかかわらず、公人としての靖国参拝が恒常化しているなど、マスコミとは違う演劇ジャーナリズムだからこそ、批判追及が出来るものだと思う。またその役割を堅持したいと思うものですが——。

この峻烈な情勢にありながら、「あなたはしあわせですか？」と、問いかけることは勝手だが、その答えが子を宿したから「しあわせ」では、陳腐すぎる。坂本の息子龍彦が親子共々窒息死させられた事実を思い起こすと、心中は波立つ。幸福を追求する権利は犯罪者だろうが、誰だろうがある。あるが、悔恨断罪無くして自分だけが「しあわせ」という言葉に頷くわけにはいかない。

また、演出にもその責任が及ぶ。新作でもあり、作者と演出の間に距離があるわけでもなく、ディスカッションは充分行うことが出来たはずだろう。にもかかわらず、表象的表層に囚われすぎて、その中身まで議論の対象に出来なかった言い訳は聞きたくない。確かにダンサーたちは良く訓練されてはいたが、理解を深めるものにはなっていない。ダンスを配置し、ダンサーたちが終始一貫して市井人として描かれていたら、情報に左右され何も知らされていない元凶の顛れを表しただろう。でも時には教団側の集団行動にも見える形では、軍隊行進を美しいと思う気持ちと同列にしか思えない。オーディションで選んだダンサー・役者たちだったから、そのあたりはなんの疑問も感じることはなかつただろうと納得はする。その中でも役者たちは、個性的な演技力、確実な演技力を持ちながら、演出とのディスカッションに欠けていたとしか思えない。役者は演出によって決定されるどころ大だが、意思のない人形ではない。意見提言は出来たはず。何も提言しなかったということは、戦時中に国家神道と共に、八紘一宇・五族共和の思想の元で他国を侵略した加害の責任を、命令だったと被害にすり替えていることと同じになってしまう。

かえすがえすも、演劇人はジャーナリストでありたい。世の中の人たちを動かすことが出来る手立てを持っている。その手立ては良い方も悪い方にも使うことが出来る。演劇は良き方向の手助けでありたいと希うのです。

2014年度 神奈川県 演劇連盟 総会

文：京浜協同劇団 藤井康雄



総会は風薫る皐月日和5月17日、青少年センターにて開催された。その中で感じたいくつかについて述べてみたい。近年の多岐に亘る諸活動に加えて新たに、神奈川県からの委託事業、マグカルシアター・マグカルフライデーが青少年センターとの共同で展開され始めた。これは長年にわたって、県や市への要望行動などを通し要求してきた趣旨に沿ったものであり、県下の青少年を中心とした多くの方々に文化的諸活動の発表の場を提供するものである。特に異を唱えるものではない。

「しかし、待てよ?!」と思うのである。ここまで多様に広がってきた「県演連」の諸活動が僅か二時間あまりの総会で加盟集団全部の理解と認識を得られたのかについてはかなりの疑問が残った。いくつか問題を整理してみたい。組織の連合体は共通の利害や目的意識または運動意識の下で成立する。かつては助成金の受け皿としての性格が強かったものが、実態としては助成金も増額されず年々拡大する事業に伴い共通する利害や目的意識が変化してきていることである。踏み込んだ論議が必要なのではないか。「入会も退会も自由です。その辺の判断は個別的にさせていただいてけっこうですから……」という緩やかな組織でいいのかどうか。

それらを考えていく要素の中に加盟集団の変化があげられる。発足当時はすべて演劇創造団体であったものが、近年ではスタッフ集団やプロデュース集団が加盟してきており、創造の課題の違いや共通項がどのようにあるのかなど、全体としての認識が曖昧なまま推移してきている。一方では歴史ある老舗劇団が次々と脱会している。時代の流れと言って済ます訳にはいかないでしょう。何故なら演劇的表現は「今日に留まらずに未来に向かつてなされなければならない」からだ。過去と今をどうしても見つめる必要がある。

それから地域と観客をどう捕らえるのかの視点も重要である。殆どの場合各集団は地域の中に存在し少しばかり強調しているならば「表情の見える」観客と繰り返し接した上演をするその一方では、広く神奈川県下に限らず募集し、多くの場合一回で終わるプロデュース上演などグローバルな視点での地域と観客の捉え方が「県演連」のなかでは「共存」している。

そして何より気にかかることは、広範囲にわたる事業を少ない予算と横田理事長以下ギリギリのスタッフの驚異的犠牲的精神でやってきていることです。個人の犠牲の上に成り立つ組織は何れ崩壊する。課題や問題の集団化に向けた討論を粘り強く始めなければと考えさせられた総会であった。

僕らの演劇

劇団やぶさか

「眠りの森～Boy's Side Adventure」

作・演出：海老原あい 1月31日～2月2日 於：相鉄本多劇場

千 秋楽を観劇。
王族の次男が、行方不明となった長男の許嫁、オーロラ姫と結婚することになったが、鳥が、長男の王冠を森の中で発見。次男は森の中へ、長男を探しに行く。



長男は恋人の魔女カラボスにより、馬に姿を変えられていた。次男は長男を救出し、嫉妬に狂った魔女カラボスはその後を追う。

道中、幽霊の子供や隣国の祈禱師やスカンク、ムササビが加わり、一行は賑やかになっていく。また、WICKEDがはじまったり、民衆の歌がはじまったりする。

ところで、この森には悪魔がいる。そして、次男は記憶喪失である。また、森にはターリアという少女がいて、ターリアと幽霊の子供は、友達である。

長男は、魔女カラボスと再会するが、魔女カラボスは、悪魔に記憶を奪われ、長男を忘れてしまっていた。馬は一生懸命に魔女カラボスに語りかける。すると、魔女カラボスは馬の言葉が理解できるようになる。馬は、魔女カラボスに変わらぬ愛を伝える。

幽霊の子供こそが、実は森の悪魔だったことが判明。次男は次男と長男のふたつの王冠により、悪魔を解放する。

魔女カラボスの記憶は戻り、人間になる。ターリアは、実はオーロラ姫である。ターリアは、幽霊は悪魔ではなく、一番大事な友達であると叫ぶ。幽霊の魂(?)は救われ、森は平和になった。森は伐採され、草原になった。以上が主なストーリーでした。

たくさんの稽古を積み重ねたという印象は感じられましたが、脚本をもっと整理する必要があると思いました。

また、ファンタジー作品なので、劇世界に入るための様々な手助けがほしいのですが、衣装と自分の想像力に頼るところが非常に多かったのが残念です。音響、照明でもっと表現できることをことごとく表現していなかったように感じられました。

オープニングでクロス(?)が手を打っていましたが、なぜ効果音も環境音も入らないのか?森の老婆の杖がマイ演が控えているとのこと。彼らの得意とする部分を存分に発揮し、良い舞台を創り上げてほしい。ムである意味は何か?幽霊にはなぜ名前がないのか?色々と感じました。

若い出演者が多かったようですが、今後はそれぞれが身内の公演ではないお芝居を観に行き、ファンタジーの表現について、研究と努力をすると思います。

しかしながら、横浜で2月という時期にこれだけの集客をし、また、各種割引やアリーナ席など、固定ファンを捕まえる試みを多く行っていたので、そういった面を生かして、神奈川演劇の底上げをする団体になってほしいと思います。

ミュージカル・プロジェクト・M.Pink 河田唱子

劇団河童座

「Kという名の同居人」 作・演出：横田和弘

4月19日・20日 於：神奈川県立青少年センター 多目的プラザ

ピ エロ好きの私は、まずチラシに心をつかまれた。青少年センターのラックの置きチラシ。チラシに描かれた、私好みのピエロと目が合ったのだ。よく見ると、なんと河童座さんの公演ではないか。しかもあらすじを読むと、このピエロはどうやら宇宙人らしい…?



興味は尽きぬまま、わくわくと会場に足を運んだ。会場は、舞台も客席も2面ずつの、四角形を描いた構造。2面の舞台の境目である中央に、扉が配置されている。

想像以上の面白さだった。突然空から舞い降りた宇宙人「K」と、地球人の少女の出会い。そこに、新曲作りに悩む売れっ子作曲家夫婦の思惑が絡む。物語は笑いを交えてポップに、テンポ良く進むが、ふと気づくと、とても難しい問題について考えさせられていた。

2面ある舞台は、ひとつが人間たちの住む賑やかな部屋、もうひとつは「K」が住むことになった真っ暗で何もない物置部屋として描かれる。

自分の星では、他人とは関わらず、小さな部屋で自分の思い通りに行動する人形と共に毎日を過ごすことが、一般的な幸せであると語る「K」。この部屋は、自分には最適な住み家である、と。「K」の部屋での、「人形」を交えたやり取りは、賑やかにも物悲しくも見え、実に面白い。

このままこの部屋で、一人きりにして欲しい、と願う「K」。自分たちとのコミュニケーションを望む少女。「K」の吹く異星の音楽が欲しいだけの作曲家。価値観の違う者同士を対比させることにより、他者と接する難しさについて、実に巧妙に問いかける。

なるほど、異星人との交流はやはり難しいものだ、

と思ったが、ふと考えれば、これは地球人同士にも起こりうる問題だ。相手の価値観と自分の価値観がぶつかった時、何を尊重し、どう接するのか。

ラスト、舞台中央で閉ざされた扉が印象的に目に残った。馬は笑いました。よかったです。あの設定を芯にすればよかったのに。

劇団やぶさか 細野美也

まりこ☆みゅーじあむ

～朗読の時間～No.3 『春』 構成・演出 川井真理子
4月25日 於:神奈川県立青少年センター 多目的プラザ

無知をさらすようだが、朗読と語りと読み聞かせの区別を知らぬままの48年である。「朗読の時間」と銘打つこの公演について、代表の川井真理子さんに「ボク、NHKの『おはなしのくに』が大好きなんですよ」と話したところ、「ああ、あれは語りですね」と即答。半世紀近くも生きた演劇人がこのていたらくでは、と反省しきりである。



さて、県立青少年センター多目的プラザにおける「マグカルフライデー」の参加作品として上演されたこの公演、

タイトルの『春』は4月という時期をふまえたものであろうが、むしろ「命の芽吹く季節」というほどの意味を持つものと考えるのが正しい。素材として選ばれているのは3つの絵本(『花さき山』『100万回生きたねこ』『ねこはしる』)と、それぞれをつなぐ2つの詩(山村暮鳥『風景』、谷川俊太郎『生きる』)である。3つの絵本はいずれも美しく輝く生命を描いたものだが、単なる生命賛歌にとどまらず、懸命な生の内的な輝きを描いている。どれも名作とはいえ、まずはこの作品群を選択したことに見識の高さをうかがい知ることができる。しかも、善行が花として新生する作品に始まり、斜に構えた生から愛を通じた真実の生への目覚めを描く作品、そして生命の根源的な苦悩を詩的に昇華させる作品へとつなぐ構成は見事なものである。

舞台には大きな装置はなく、少しの仕掛けをもった布があるばかり。それは決してリアリティの高いものではなく、むしろ手作り感に満ちたものであるが、丁寧な朗読と相まって、深いリアルを感じさせる。こういう上演を通じてこそ、身体と声という俳優の基本的な資源がもたらす、演劇的な「リアル」とは何かということをあらためて感じさせられる。シンギング・リンとキーボードによる静謐な音楽が、そうしたリアルをより一層美しく縁取っていく。

主に東京で活動する小島とら、丸山まことといったプロに加えて、G/9-Projectの仲尾玲二、横須賀市民劇場プロジェクトの杉山裕子などの共演を得て、「まりこ☆みゅーじあむ」の人脈の豊かな広がりを感じる公演であった。

井上学

編集後記

ドラマ神奈川も今号で70号を迎えました。季刊誌ですので長い歴史を積み重ねてきたものだと感慨深いものがあります。100号までまだまだ何年も掛かるのですが途切れることなく発行できますよう努力してまいります。

今号では第11回神奈川演劇博覧会、TAKINKAATなど神奈川県演劇連盟の春の企画が取り上げられました。神奈川演劇博覧会が11年目、TAKINKAATが4年目。徐々に名前が浸透してきました。毎年、ドラマ神奈川では取り上げているのですが、その年毎に新しい発見があることが取材をしていてとても面

白いと感じています。

次号では青少年のための芝居塾を取り上げますが、神奈川県立青少年センターの大ホールでの公演になります。総勢67名がどのような舞台を創り上げるのかとても楽しみにしています。そして、神奈川県演劇連盟の各劇団が参加する神奈川演劇フェスティバルも始まります。8月～12月まで様々な芝居が目白押しです。ドラマ神奈川も積極的に追いかけていきます。

緑慎一郎

神奈川県演劇連盟加盟団体(50音順)

- H&Bシアター●演劇プロデュース『螺旋階段』●京浜協同劇団●劇団蒼い群●劇団河童座●劇団かに座
- 劇団川崎演劇塾●劇団こゆるぎ座●劇団やぶさか●劇団「横綱チュチュ」●劇団よこはま壱座●虹の素●風雲かぼちゃの馬車
- まりこ☆みゅーじあむ●ミュージカルプロジェクト●ヨコスカ・ベアフットシアター●横浜小劇場

神奈川県演劇連盟HP: <http://kenenren.org/>